

東海の古代

第277号 2023年9月

会長 : 畑田寿一
編集 : 石田泉城 投稿先アドレス : toukaikodai@yahoo.co.jp
HP : <http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm>

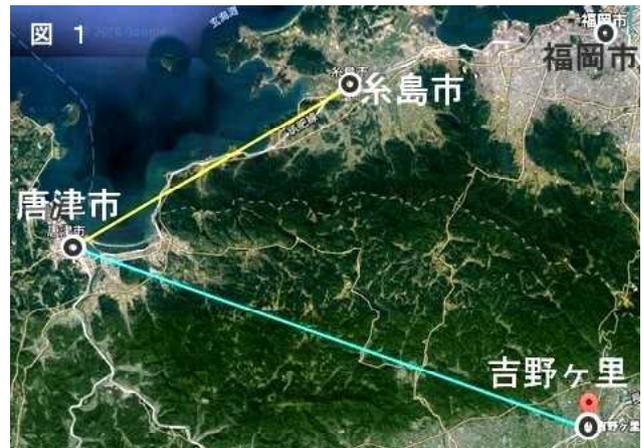
伊都国は吉野ヶ里だった

名古屋市 田沢 正晴

1. 伊都国は本当に糸島か

今年4月に福岡県糸島市の伊都国歴史博物館を訪れた。国宝に指定された直径46.5cmの大型内行花文鏡（仿製鏡）をはじめ、数々の見ごたえある展示物に接することができ、さらに4階の展望スペースからは高祖山を間近に眺めることができる。このように素晴らしい博物館ではあるが、伊都国は糸島市であるとの定説が定着し過ぎたあまり、歴然と「伊都国」を名乗っている。そのことが唯一残念でならない。

というのも、私は『魏志』倭人伝に記された伊都国は、糸島ではないと考えるからである。そこには、「末盧国から東南陸行五百里、伊都国に至る」と明確に書かれているので、定説が糸島とするには二つの大きな疑問が残る。一つは末盧国を唐津と想定した場合、糸島は唐津の東南ではなく東北であること。もう一つは伊都国が糸島なら末盧国（唐津）で下船するのではなく、糸島まで船で行く方が合理的であるのに、なぜわざわざ悪路を陸行したのか、の二点である。（図1）



2. 伊都国が糸島である根拠

それでは、定説で伊都国を糸島に比定する根拠は何だろう。一つ目はその音であろう。この地域は古くから怡土いとと呼ばれ、756年には高祖山に怡土城が築かれた。また、『日本書紀』仲哀天皇九年条には伊観縣いとのかたの記述も見られる。この「いと」の音から伊都国を糸島平野とすることが定説となった。

ところが、『日本書紀』卷第八（仲哀天皇八年条）には「伊蘇国いそがのちに伊観いとに訛った」と記されている。14代仲哀天皇の在位は4世紀中葉と考えられるので、邪馬壹国の時代の糸島は「いと」ではなく「いそ」と呼ばれていた可能性がある。

『魏志』倭人伝で伊都国の次に現れるのが奴国である。奴国が金印の倭奴国なのおがたや儼県からの連想で博多湾付近とするのが定説となっており、奴国と伊都国がセットで語られて、伊都国糸島説の根拠とされる。セットだと相乗効果で説得力が増すのだろうか。ただし、私は那の津、儼県は「いと」と同様、4世紀中ごろの仲哀天皇以降の地名であり、奴国は博多湾沿岸ではないと考えている。

伊都国が糸島であるとする定説の根拠の三つ目は、三雲南小路遺跡、平原遺跡などの考古資料の存在だ。これらの遺跡からは前漢鏡、後漢鏡が出土しており、確かに大陸との交流があったことが分かる。ただし個人的には、邪馬壹国との関連よりもむしろ、後に大王家と称される天孫系集団との関連に興味を惹かれる。

3. 糸島は天孫降臨の地

先に述べた大型内行花文鏡の直径46.5cmは、漢の時代の寸法でいうと「二尺」となり、この直径では円周が「八咫」となる。原田大六氏（1917-1985年）はこの銅鏡を伊勢神宮の御神体八咫鏡と同型の鏡であると主張している。また、この銅鏡を出土した平原遺跡1号墓の墓穴の東端から東南へ14.8mの位置にある直径65cmの縦穴は大柱の跡とされる。墓から見て東南の方向には日向峠があり、墓穴と大柱と日向峠は一直線に並ぶ。

（図 2 綾杉るな氏「ひもろぎ遺蹟」より）



そして、日向峠から2km北には高祖山（標高416m）がある。そう、伊都国歴史博物館から展望できる高祖山である。『古事記』に記された「**筑紫の日向の高千穂の久士布流多氣**」の「くしふるたけ」は高祖山の南の峰と言われている。また、平原遺跡からは、三種の神器に相当する鏡、勾玉、太刀も出土しており、天孫降臨の地は筑紫であるとの説を支持したい。

これらのことから、この周辺では祭祀が盛んに行われていたことは察せられるが、楼観や城柵などの遺跡は見当たらず、『魏志』倭人伝に描かれた一大率による検察を諸国が畏れるようなイメージがない。

伊都国が糸島であるとする定説が根拠としているのは、「いと」の音と遺跡群の存在などであるが、そのどちらも、疑問符がつくことがご理解頂けたらどうか。さらに、糸島は末盧国から見て東南の方角ではないこと、唐津に上陸し船から大荷物を全部降ろして糸島まで陸路で移動するのは、常識的には考えにくいこと、の先に述べた二点に加わるので、伊都国が糸島であるとの定説が覆ることになりそうだ。

4. 伊都国は吉野ヶ里

それでは、伊都国はどこだろう。

繰り返しになるが、倭人伝には「**東南陸行五百里、伊都国に到る**」とある。出発点の末盧国は呼子か唐津のどちらかであるが、桜馬場遺跡を考慮して唐津とする。ここから東南の方角に向かうと、松浦川、巖木川に沿って佐賀平野に出る。さらに進むと吉野ヶ里遺跡に辿り着く。桜馬場遺跡からここまでの距離はおよそ60kmである。里数にすると790里で、500里をオーバーするが、この吉野ヶ里遺跡こそ伊都国であると確信する。

ここで、「吉野ヶ里遺跡が伊都国である」とする根拠を4項目列記する。

(1) 港があったこと。

『魏志』倭人伝には「**郡使倭國皆臨津搜露**」(帯方郡の使者が倭国へやって来たときには、いつも**[この大率が伊都国から] 港に出向いて調査、確認する。**)とあって、伊都国には港があると書かれている。この付近の海岸線は、伊都国の時代には佐賀市諸富町にあったと推定され、遺構からは港のようなものが見つかっている。

玄界灘の唐津で下船したあと、あえて陸路で再度港のある場所に向かったのだから、その場所は有明海に面した場所以外に考えられない。

(2) 一大率を置くに相応しい建物があること。

邪馬壹国には望楼(物見櫓)、城柵、宮室、邸閣などがあると『魏志』倭人伝に記されている。これらの建物に相当する遺構がセットで発見されているのは、現在までのところ吉野ヶ里遺跡だけであり、近畿地方はもちろん、九州の他の遺跡からも発見されていない。このことから、吉野ヶ里遺跡は一大率が置かれた伊都国であると考えられる。

(3) 「いと」の音が吉野ヶ里にもあること

吉野ヶ里遺跡の隣接地に三津永田遺跡があるのはご存知だろうか。所在地は佐賀県神埼郡吉野ヶ里町三津字永田で、今は三津は「みつ」とよむが、かつては「みと」だったかも知れない。三津、御津を「みと」と発音する例は静岡県、愛知県にある。「みと」の音が帯方郡の遣使に「いと」と、間違っただけで聞き取られた可能性は、十分にある。

いずれにしても三津という地名には津の文字があり、この場所に港(津)があったことを如実に物語っている。

(4) 唐津から神埼への古代道路があったと推定されること。

唐津から東南へ500里進む行路について検討する必要がある。もちろん240年頃の地図は存在しないが、730～740年頃に成立した『肥前国風土記』や927年に完成した『延喜式』に記録されている宿駅しゆくえきの名称が手掛かりとなる。

図3にあるように、呼子あたりには登望駅、逢鹿駅があり、唐津付近には賀周駅かすがあって佐嘉駅さかを通過して神埼(吉野ヶ里)方面に駅路が繋がっている。駅名から所在地を比定し、それを線で結んだものがこの推定図である。

実際に道路跡が残っているところは少ない。しかし唐津市巖木町と多久市境にある笹原峠ささはらの北300mに道路状の切り通し遺構がある。巖木町文化財審議委員長の原田重和氏が、幅約10mの切通し状の古道跡を180mにわたって認めたと1990年2月14日付佐賀新聞が報じている。

なお、木下良氏は、『社会科学』47号(1991年)に掲載の「古代官道の軍用的性格 一通過地形の考察から」において、笹原峠の標高は85mでこの官道はそれよりも45m高い130mであること、神埼町祇園原の道路遺構(切り通し)に類似していること、に注目されている。

笠井新也氏の邪馬台国大和説は有効か（一）

東海市 大島 秀雄

1. はじめに

邪馬台国の場所については現在も未決着で論争が継続中であると認識していたのですが、某 YouTube チャンネルではもう大和で決着済みだという紹介がありました。

そこでこの機会に大和説の笠井新也氏の論考の概要と、『太平御覧』の邪馬台国と於投馬国関連の内容を整理・考察し、また東 潮（あずま うしお）氏の論考の概要を整理してどのような進展があったのかを眺めつつ、思うところを述べてみたい。

2. 笠井新也氏の2編の論考の概要

2.1 「邪馬台国は大和である（一）」（『考古学雑誌』第12巻第7号、大正11年）

- (1) 邪馬台国と卑弥呼とは魏志倭人伝中の最も重要な二名辞で、しかも最も密接な関係を有するものであり、その一方さえ解決を得れば、他はおのずと帰着点を見いだし得る。
- (2) 推定地の大和の地名が邪馬台なる地名と語音上一致し、大和は大和平野の開展する所であり、戸数7万の繁衍地として格好の場所である。
- (3) また大和はいたる所に古墳、その他の古遺跡に富んでおり、魏代前後において既に文化の中心地を形成していたことは考古学上、史学上著しい事実である。
- (4) 魏志の記事中、郡より奴国に至るまでの地理は既に学会に定説がある。
- (5) 末盧国着陸後の魏志の方位は、伊都国を経て奴国に至るまで、いつも東北をもって東南と記しているので、魏志の東は正に北を指すものであり、南は正に東を指すものと見なければならない。

従って、奴国より「東行不弥国ニ至ル」とあるので、不弥国は灘県、すなわち今日の博多より北方にこれを求めねばならないので、距離百里からこれを求めると、不弥国より投馬国は水行なのでその位置は水路の出発点であることを考慮して津屋崎付近と推定する。

不弥と津屋崎の南20数町にある福間は語音が類似している。

- (6) 不弥国より「南、投馬国ニ至ル」とあるので、この南の字もまた実際において東と解釈しなければならないが、魏志の航路を以って瀬戸内海に比定するならば、投馬国の位置がどこであれ陸行1月を要する邪馬台国の位置を求めることは困難である。

従って、不弥国以降の行程は山陰の近海を航行し、出雲に寄泊し、更に東航して畿内北方の門戸として古代史上著名な敦賀に上陸し、越前・近江及び山城を経て大和、すなわち邪馬台国に入ったものと考えられる。

- (7) 投馬国の投は音が「ヅ」であって、投馬は「ヅマ」であり、しかも出雲すなわち「イヅモ」の「イ」は母音の発語で音が軽いから自然に省かれたもので、「マ」と「モ」は同行音で相通ずるものとすれば、出雲・投馬の両地名はまったく一致する。

2.2 「卑弥呼即ち倭迹迹日百襲姫命（一）」（『考古学雑誌』第14巻第7号、大正13年）

- (1) 邪馬台国が大和であることが明らかになった以上、卑弥呼は大和朝廷関係の婦人であることは自然の帰結である。
- (2) 魏志の卑弥呼は我が上古祭政一致の時代における宗教的女王であって、常に祭祀を事とし、神意を奉じて民衆を服せしめたのであろう。卑弥呼の事績の魏志に現れている期間は景初2、3年から正始8、9年といえども間違いがない。
- (3) 『日本書紀』において卑弥呼の年代を崇神天皇の御代にあてるとは余輩の信じて疑わないところである。

すなわち、上古史における年代は菅政友・那珂通世らの古事記年紀の研究成果に基づき、成務天皇の古事記の崩年干支が乙卯で西暦356年に相当し、成務の3代前の崇神天皇の古事記の崩年干支が戊寅なので、西暦258年に相当するからである。

(4) 倭迹迹日百襲姫命は崇神朝第一の女傑であって、その神意を奉じて奇跡を行い、未然に知って反逆を看破するなど、当朝の信頼と畏敬とを受けるに十分であったに相違ない。

また、勢望の帝王をも凌駕する有様であったことは、その陵墓築造の大規模であったことによっても推察される。

さればこの姫命を以って卑弥呼にあてることは決して無謀ではない。

(5) 孝霊紀によれば天皇の妃・倭国香媛が倭迹迹日百襲姫命を生んだことになっているが、孝元紀によれば天皇の皇后・薨色謎命が倭迹迹日百襲姫命を生んだことになっている。

しかし、倭迹迹日百襲姫命と倭迹迹日百襲姫命が同一人物であることは、崇神紀にこの両名が混用していることから察せられる。

崇神紀に天皇の姑・倭迹迹日百襲姫命と出てくるので、孝霊の皇女とすれば長寿に過ぎるから、倭迹迹日百襲姫命は孝元天皇の皇女説を採用する。

(6) 魏志の「**名付けて卑弥呼という。**」はヒメミコトの義で、古代における高貴な婦人の尊称である。また、倭迹迹日百襲姫命は孝元天皇の皇女で、崇神天皇の姑である。その名に「姫命」の語を含んでいるのは、卑弥呼の名称とよく一致している。

(7) 魏志の「**鬼道につかえ、よく衆を惑わす。**」は、卑弥呼の個人的資質を現した最も重要な記事である。その意味は、神意を仮り宗教的奇蹟などを行い、以って民衆を畏服・信仰せしめたということを示している。倭迹迹日百襲姫命も一種の神女であり、時々宗教的奇跡などを行い、一般の尊崇・信仰を受けていたのであり、この点もよく一致している。

(8) 魏志の「**年すでに長大なれども夫を持たず。**」は、神に奉仕する身であるから信仰上結婚を敢えてしなかったのであろう。倭迹迹日百襲姫命もまた神に奉仕する身として、また神の妻になったという設定であるので、同様であったろう。従ってこの点でもよく一致している。

(9) 魏志の「**男弟有りて国を助け治む。**」は、国家統治の実務は弟が担当したということであろう。倭迹迹日百襲姫命の場合は崇神天皇が国家統治の実務をになっていたのであり、一方が弟、他方が甥の差はあるものの、外国人の観察、もしくは見聞としてこの差は許すべきであろう。

(10) 以上の考察の結果、卑弥呼と倭迹迹日百襲姫命の人物・事蹟は大体において一致している。

3. 『太平御覧』の邪馬台国と於投馬国

中国北宋の太宗皇帝が閲覧した『太平御覧』(983年完成)の「倭」の項では魏志曰として『魏志』倭人伝と似たような記述があります。

しかし、行程の記述は、「伊都国・・又東南至奴国・・又東行百里至不弥国・・又南水行二十日至於投馬国・・又南水行十日陸行一月至邪馬台国」となっており、これは以後の倭国についての知見に基づき、各種版本の『魏志』倭人伝の中から有用なものを選択した結果ではないかと思われます。この行程の記述で方位は見直されていないものの連続式の読みを規定しており、解釈が分かれることはありませんので、邪馬台国大和説にとっては非常に有利な文献です。

また、投馬国に対応する国名は「於投馬国」となっており、「於」を接頭辞とする意見と、『日本上代史管見』(末松保和、昭和38年)では出雲の名の起源はアイヌ語の「エトモ」(入江を抱いた岬)とする意見があるとされ、朝鮮史研究者の末松保和氏は笠井氏の投馬国＝出雲に同意されています。(つづく)

吉野ヶ里遺跡にみる弥生の「クニ」 その1

一宮市 畑田 寿一

弥生集落は600年以上の年月を経て発達してきた。特に後半の300年は稲作の普及とともに身分制度が出来上るとともに、商工業の発達により「ムラ」が「クニ」に変革した。この変革は吉野ヶ里遺跡から始まったと考えられる。

今回は吉野ヶ里遺跡の発展の歴史を眺めながら「クニ」誕生の経緯を探ってみたい。

1 弥生集落の伸展

(1) 弥生集落の伸展

- ① 1世紀頃の気候の寒冷化に伴い、デルタ地帯に存在した弥生集落は移転を余儀なくされた。この時期に銅鐸や銅剣の埋葬が行われたと思われる。
- ② その後、土地や食料の奪い合いに対処するために高地集落が造られるようになる。「倭国大乱」の時代がこれにあたる。
- ③ 2世紀後半から3世紀初頭になり、気候の安定化に伴い、集落は平地に造られるようになった。しかし、西国はまだ紛争が納まらず、環濠集落は存在した。一方、東国では土地に余裕があり、環濠は外敵の防御より交通路や魚の養殖、稲作の溜池に使われるようになる。また農業の普及により社会の階層化が進み、地域ごとに首長が存在するようになる。
- ④ 3世紀後半以降、集落の集約に伴い「大王」が出現するとともに、社会の安定化に伴い地域間の交流が盛んになり市が開かれる様になる。ヤマトの纏向遺跡などは、この好例と捉えたい。

(2) 全国の大型弥生集落

1世紀から3世紀を盛期とした弥生遺跡を眺めると、次の箇所がある。

いずれも環濠集落であるが、東に行く程、防御機能が弱くなる。都市化とする説もあるが、前述の様に人口密度によるものでは無いか。

地方	遺跡名	年代	特徴
関東	大塚遺跡	1C-3C	環濠集落、竪穴建物90棟、稲作
中部	朝日遺跡	B1-3C	環濠集落、貝塚、遠賀川土器
近畿	伊勢遺跡	1C-2C	環濠集落、棟持柱建物、5角形竪穴
	池上曾根遺跡	B2-3C	環濠集落、棟持柱建物、稲作
	(纏向遺跡)	(4C)	環濠なし、大型建物、東海系土器
中国	田和山遺跡	B1-2C	高地集落、柱遺跡(祭祀)
	妻木晩田遺跡	1C-4C	高地集落、竪穴建物700棟、鉄器、玉
	青谷上寺地遺跡	B3-4C	高知集落、殺傷痕骨、防護壁
	綾羅木郷遺跡	B2-2C	環濠集落、珪砂(ガラス)、貯蔵穴
九州	安国寺遺跡	3C-4C	周囲大溝、稲作、貝塚、農耕具
	板付遺跡	B10-3C	環濠集落、稲作、灌漑施設
	平塚川添遺跡	2C-4C	環濠集落、高床建物、銅製品、農耕具
	吉野ヶ里遺跡	B1-3C	環濠集落、地域の中心地、女王
壱岐	原の辻遺跡	1C-4C	環濠集落、船着き場、鉄器、交易

注 (年代は筆者推定)

(3) 九州における弥生時代の社会構造の変化

時代	西暦	場所の事例	主な出来事
弥生前期 ～中期	BC5～	吉武高木遺跡	身分制度の分離（大人、下戸、生口） 多紐細文鏡、銅戈、銅矛、玉類
弥生中期	BC1～	三雲南小路遺跡 須玖岡本遺跡 吉野ヶ里遺跡	前漢鏡、ガラス璧、勾玉 女王、首長の登場 身分制度の厳格化
弥生後期	AD2～	平塚川添遺跡	集団農耕、身分制度、大王の登場
弥生晩期	AD3中	小部遺跡	大型建物、市場、広域交易

従来、稲作の始まりを持って弥生時代の始まりと考えられてきた。しかし、稲作が紀元前10世紀から始まる箇所（籾）の出現により、弥生時代は稲作の始まりにあるのではなく、稲作がもたらす社会構造の変化（階級制の出現など）をもって弥生時代とすべきとの考え方が台頭してきた。

この新たな弥生時代の定義によれば、西日本と東日本では500年近くのずれがあり、この期間を「縄文系弥生文化」、「続（エピ）縄文」、「東日本型弥生文化」など、研究者によって様々な呼称が与えられており、定まった名称はない。

結局、縄文時代に比べて弥生時代は豊かな生活を送れた訳ではなく、人口の増加に伴い、生活の糧を得るための次善の策として稲作に頼ったと考えるべきで、縄文時代（狩猟+園芸農耕）の方が平等であり働きなくても良い時代であり、その結果、稲作の普及が進まなかった。

2 吉野ヶ里遺跡の集落の変化

吉野ヶ里遺跡では次の様な集落の変化があった。

(1) 2世紀まで集落

南の丘陵地を一周する外環壕が掘られ、首長を葬る「墳丘墓」や一般人の沢山の「甕棺墓地」が造られる。この段階で、上限関係が生まれ、外敵の防御が厳重になった。

(2) 3世紀の集落

外環壕が更に堅固になり環濠集落となる。特別な区域（内郭）が区切られ北内郭には大型建物が登場する。また祭壇と思われる施設もこの時代に登場する。この時期が吉野ヶ里遺跡の最盛期にあたり、周辺の集落も支配下に置いていたことが窺われる。

(3) 4世紀の集落

集落の南側に前方後方墳が造られる。吉野ヶ里遺跡は3世紀には衰退し、4世紀に別の氏族が住み着いたと考えられてきたが、今回の石棺の発見により集落は連綿と続いたと考えて良い。場所が北九州と有明海を結ぶ要所にあり、交易の中心点であった。

(次号につづく)

前回の例会の話題

- ・『隋書』が記す「嫁が夫の家に入るとき必ず火を跨ぐ」とは 一宮市 畑田寿一
- ・古代豪族・中臣氏のルーツを探る 東海市 大島秀雄

例会の予定

- 1 日時 9月16日(土) 13時半～
- 2 場所 名古屋市市政資料館

- 来月以降の例会 原則土曜日
10/21、11/18、12/23

会員の投稿について

- 会報誌への投稿（編集担当：石田）
toukaikodai@yahoo.co.jp

- 投稿締切り日 9月30日(土)

- 次回のテーマ 「水行十日陸行一月」等 倭人伝に関連すること。